

第5回「確かな学力育成プラン」検討委員会 議事録

- ◆日 時 平成29年1月31日(火曜日) 午後3時30分～午後5時45分
- ◆場 所 仙台市役所上杉分庁舎 2階 第3会議室
- ◆出席委員

氏名(敬称略)	所属 職名	備考
荒井 崇	東北大学大学院教授	
板垣 信哉	宮城教育大学教授	委員長
大泉 晶子	仙台市PTA協議会 監事	
大草 芳江	(有) FIELD AND NETWORK 取締役	
亀倉 靖宏	仙台市立上杉山中学校長	
今野 和賀子	仙台市立錦ヶ丘小学校長	副委員長
佐々木 守世	(株) ホームセレクト 代表取締役	
針生 真由美	仙台市PTA協議会 副会長	
宮本 真由巳	住吉台中学校区学校支援地域本部 SV	
杉山 勝真	仙台市教育委員会学校教育部長	
今野 孝一	仙台市教育委員会学校教育部参事	
猪股 亮文	仙台市教育委員会教育指導課長	(欠席) 行場主任指導主事出席
堤 祐子	仙台市教育センター所長	
佐藤 淳一	仙台市教育委員会学びの連携推進室長	

◆傍 聴 1名

◆報道関係 なし

◆配布資料

- ・確かな学力育成プラン2017(試案)

◆会議の概要

- 1 開会
- 2 委員長挨拶
- 3 報告

(1) 現段階のプラン案について

- ・(佐藤委員) 確かな学力育成プランの骨子, 第1章～第2章の説明。
 - <第2章の内容>本市で育成すべき確かな学力の在り方, 課題改善重点プロジェクト, 幼児期からの切れ目のない教育の推進, 放課後, 長期休業中における学習支援等
- ・(事務局) 第3章, 基礎的知識・応用力の説明
 - 市標準学力検査結果から小学校算数「4年生」(3学年の学習内容)において課題が見られている。
- ・(事務局) 第3章, 学習意欲の説明
 - 学習意欲の科学的研究に関するプロジェクトによる分析, リーフレット内容について
- ・(事務局) 第4章の説明
 - 全体…以下のA～Fの施策は相互に関連しているものであり, 同時に推進していく必要がある。現行プランではEの「家庭や地域の教育環境の充実」に含まれていた「自分づくり教育の充実」を抜き出して, Dとして, A, B, Cを支えるものとして打ち出している。
 - A 教育指導手法の充実
 - B 指導体制の充実
 - C 確かな学力を育成する上で前提となる環境の整備
 - D 自分づくり教育の充実
 - E 家庭や地域の教育環境の充実
 - F 学力・学習状況調査の的確な把握

4 協議(進行: 副委員長)

- ・(委員長) 英語学習の意欲について。解説付きの解答用紙を配付した場合, 次のテストの点数が上がると思う生徒が多くなる。

(1) プラン案への各委員の意見について

- ・(事務局) 委員の皆様からメール等で事前に学習意欲の課題, 分かる授業の工夫, フィードバックの仕方について, 確かな学力の概念図, 問題集づくりなどの具体策についてご意見をいただいた。
- ・(今野委員) 次の学習指導要領ではさらに AL についてなどの新しい学習が入り, 応用力が大事になる。これまで応用力の施策が弱かった。5 年後, 基礎と応用の関係だけでいっていたら追いつかなくなると思うのでご意見いただきたい。
- ・(荒井委員) AL を行う時間的余裕があるのか。応用力を学校外で身に付けることが大事になってくる。
- ・(亀倉委員) 応用力から基礎的知識について, 横並びになっている新しい図に賛成である。
- ・(佐々木委員) AL は授業改善のための指導となっているが, これは難しいものなのか。
- ・(行場主任) 教育指導課で AL 推進支援事業を行っている。AL は授業改善の視点として捉えている。子供の学びの過程の質を高めていくことが目標。拠点校の実施概要を AL 通信として各学校に配信している。AL の内容についてはこれまでも先生方が取り組んできたもの。改めてしっかり取り組みましょう, というもの。AL からの授業改善については決して難しいものではない。
- ・(佐々木委員) 一部の方だけの取組だけではもったいないと感じたので質問した。
- ・(宮本委員) 応用力をつけるための授業についてはあまり思い浮かばない。学校支援地域本部などの外部でやっている方たちの力を借りるのが近道かと思う。小 6 で LED のプログラミングのことを外部から指導してもらったことがある。授業ではないところで刺激を味わえば意欲が高まるのでは。
- ・(大泉委員) 聞いた話だが, 学力を上げている県では, できる子ができない子に教えるなど, 生徒同士の教え合いにより, コミュニケーション能力も高まり, 学力が改善されたことがある。マニュアルはできるが, その先はできない子が多い。学校評議委員会でも話題になった。人としての応用力を身に付ければ勉強にも落とし込める。自己肯定感を高めるためにも, 子供同士の教え合いも効果があるのでは。
- ・(今野委員) 大学の入試問題が変わる。子供に求められているものも違ってくる。
- ・(委員長) 入試問題の形式に違和感がある。読解については, 仙台市のテストに教科を越えた応用の読解問題があってもよいのでは。
- ・(堤委員) 応用といったとき, 体験学習の充実が挙げられる。AL はジグゾー授業のような印象。授業の工夫が求められている。
- ・(針生委員) たく生きの授業を参観した。相手のよいところを探すという授業。普段の授業では解答を求めるものだが, たく生きではお互いのよいところを子供たち同士で見つけていこうとしている。コミュニケーション能力を高める上でたく生きの授業は有効と思った。
- ・(大草委員) 応用力は何かというと, 社会の中で新しい価値をつくることや解決されていない問題を解決していくことが, 今まで学んだことを応用することになる。教科書の世界と現実の世界が乖離している。リンクしないまま学んでいる。学生の自信のなさを感じている。失敗するからやらないという状況。応用力については根が深い問題で自分自身も悩んでいる。学んでいることを現実の問題につなげることが必要。
- ・(副委員長) AL のモデル校の今後については。
- ・(行場主任) 平成 29 年度, AL のモデル校全市公開をする。平成 30・31 年度, 新たな策定をしていく。
- ・(堤委員) AL については理論的などをセンターで研修を行う。
- ・(大草委員) 自己肯定感という言葉について定義が必要ではないか。友達から認めてもらうことが大事なことは分かる。しかし, 心配なこととして, 周りに認めてもらいたい気持ちの強い学生が多く, 認めてもらおうとして頑張っているが逆に中身がないことに本人が悩んでいる, ということがある。やたら何でも OK ではどうか。本当の意味での自己肯定感が必要。親の保護が強くと, 大学生になってもそのしがらみがとれない学生が見られる。シラバスですら決められなくなっている。家族とのコミュニケーションも大事だが, それが逆に過保護になって逆効果になってしまうのではないかと心配もある。認められないと高まらないというのでは不安である。自己肯定感の定義付けが大事だと思う。
- ・(副委員長) 言葉の定義は大事である。言語能力もしっかりと身に付けたいといけない。思考力・判断力・表現力の根っこには言葉がある。主張やその根拠を他の人に分かりやすく正しく伝えら

れる子供を育てることは、英語が入ってくることでよけいに母語としてしっかり定着させないといけないだろう。短い時間で自分の考えをまとめて表現することは弱く、授業でもあまり扱ってきていない。英語と国語が言語力を促進するようなプロジェクトができるとうい。

- ・(今野委員) 言葉の定義は大事なので脚注としてプランに入れる。市民にも分かるように。

(2) 課題改善プロジェクト等について

- ・(荒井委員) 子供の貧困について。時間外に学生がボランティアで勉強を見る取組がされている。家庭ではちょっと…という場合、心のケア的なことをやることも必要。学生がメンターとして関わり、人生に対して意義を認めるようなことをしていくといいと思う。D層が改善されるのでは。
- ・(佐々木委員) 小5で下がる傾向があるが、ここが分析されるとよいのでは。
- ・(佐藤委員) 集団を追いかけているが、毎年5年生が下がっている。
- ・(佐々木委員) 明確な要因は何かあるのか。
- ・(佐藤委員) 学校質問紙において小中の比較をすると、小学校のほうが中学校より補充的な学習を行っている割合が低く、教科の好き嫌いもある。授業中に落ち着きがないという課題を抱えているところもある。
- ・(宮本委員) 学校支援地域本部のことについて。放課後の学習支援について対応できるかと思う。児童館を高校生が活用できるようにして、利用率も高い。貧困家庭の子供たちの学習スペースにもなると思う。小学校のサマースクールでは中学生が丸付けをする。小学生にとっては身近な人が見てくれることもあり、中学生には自信がつく。教員多忙化対策も必要で、多忙だとプランも学校側から理解してもらえなくなる。
- ・(大泉委員) 素晴らしい提案だが、実際にスーパーバイザーをしていると、地域の特色、歴史、住民が複雑だということを感じる。いろいろな活動をしてみたいが、実際にボランティアが集まるか、という課題もある。台原は小学校から大学まである。学生にも手伝ってもらえるように構想している。行政側から地域への支援もあると助かる。
- ・(佐々木委員) 人手について話を聞くことが多い。職場体験での事業所との関わりを生かすとよいのではないか。財産を活用するとよい。企業から学校支援地域本部へのサポートも可能と考える。
- ・(大草委員) 算数について2点
 - ①正答率の低さ、無解答の多さにショックを受けている。全国比という相対評価だけではなく、問題に対してどれくらい答えられているかという見方も必要。
 - ②算数・数学の苦手意識は文系・理系という将来の進路の選択にも関わる。特に文系は数学が苦手だからという消極的な選択になることが多い。(こういう問題が解けない、という) 具体的な課題を出した方がよい。サイエンスの中で、力を貸したい人も多い。
- ・(委員長) 親の収入に関係なく力を付けることが必要。授業と家庭学習の有機的なつながりが大事になる。教科ごとのワークブックの購入をしていると思うが、ある中学校では、きちんと使っていない。ワークブックの説明がなく、分からなければ家でもできない。親の収入と関係なく力を付けるためには、購入しているワーク等は学校でも、家庭でも使えるようにする。授業と家庭学習の連携を促進する具体的手立が必要。
- ・(佐藤委員) 当初は震災からの支援だったが、「タダゼミ」があり、中学生、高校生が市民センターで行っている。また、各区で生活保護世帯の子供たちに塾のようなものを行っている。貧困について学校で対応することはなかなか難しい。大学との距離の問題等がある。貧困に特効薬はなく、妙案がないところ。荒巻小は福祉大との連携がうまくいっているが、マッチングの問題もある。

5 事務連絡(事務局)

- ・次回、引き続き新プランの検討で協議する。5月にパブコメをとる予定。
(次回: 第6回 平成29年3月1日(水) 午後3時30分~ 教育局第1会議室)
- ・子供の貧困については他局との連携が必要。また放課後の学習支援についても、どうまとめていくかが課題。

6 閉会

平成29年6月2日

署名委員

板垣信哉

